

6月13日(月)

あなたが行かれるところに私も行きます

聖書朗読 ルツ記 1:8~18

お母様が行かれるところに私も行き、住まれるところに私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。

ルツ 1:16

最近、友人が結婚して素敵なお式を挙げました。彼女は結婚を機に、夫が既に住み働いている、州に引っ越しました。結婚により、二人で聖継活するにあたり、いろいろ調整したり妥協したりしなくてはなりませんでしたが、しかし、力を合わせて、主のみ恵みによって、一生懸命な愛し合う二人は新しい環境にほどなく順応するでしょう。

今日の聖書箇所では、ルツは住み慣れない環境に順応しなければならないことが書かれています。彼女は故郷であるモアブの地と家族を離れ、義母ナオミの世話をするために、ナオミの祖国、ユダの地に一緒に戻りました。ルツは、畑を見つけては収穫後の落ち穂を拾い集め、骨惜しみせずに働きました。カンカン照りの暑さの中での落ち穂拾いという文字通り腰を折っての重労働をこなし、脱穀し調理して自分とナオミの食糧にしました。

国中を移動している現代の人たちと違って、ルツにはeメールもスカイプもフェイスブックも、故郷にいる友だちや家族を懐かしむホームシックを癒やしてくれる他のどんな手段もありませんでした。でも、ナオミに対する献身的行いとナオミの適切な導きによって、ルツはボアズに買い戻され妻となりました。人間関係において忠実であることによって、神様をたたえることができるのです。

讃美歌 II 191

祈り 主よ、適応性をもって新しい立場や問題に順応できるように、お導きください。

イエス様のお名前によって。アーメン。

スー・レイサム



ジャン=フランソワ・ミレー 落穂拾い

## 今日のカ

2022年6月13日~6月19日

翻訳 岡元 裕子

編集 野口 恵美子

この冊子の聖句は、新改訳聖書第三版を使用しています。

御茶の水キリストの教会

6月14日(火)

## サウル王の失敗

聖書朗読 Iサムエル記 15:1~16

主は、全焼のささげ物やいけにえを、主の御声に聞き従うことほどに喜ばれるだろうか。見よ、聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。  
Iサムエル記 15:22

今日の聖書箇所の話は、今の世の中ではありふれた話です。私たちが見聞きする、馬鹿げた行為をさも賢策であるかのように見せて長々と語る現代の国家元首たちの報道と良い勝負です。でも、サウル王は夜のニュースで非難されたのではありません。神様に直接、説明責任を負っていました。彼はどのように行動しましたか。主の御顔を避けて逃れようとしたヨナのように、主がお命じになったことを無視し、自分の取った行いを正当化しようとしていました。

主のご命令はアマレクを討ち、そのすべてのものを聖絶せよというものでした。アマレク人だけではなく、牛も羊も、らくだもロバも、家畜を一頭残らず殺さなければなりません。しかし、戦いに熱狂するうちにサウルは私腹を肥やす機会を見つけ、自分のやり方でやることにしました。アマレク人の王アガグを生け捕りにしましたが、肥えた羊や牛の最も良いもの、子羊とすべての最も良いものを聖絶せず、連れて帰ることにしたのです。

残念ながら、サウルは主の御声にすべて聞き従わなかったことを正当化しようとして、自分の行ったことを良く見せようと詭弁(きべん)を弄(ろう)しました。「主にいけにえを献げるために、聖絶の物の中の最上のもので、分捕り物の中から羊と牛を取ったのです。」サウル王を非難しているあなた、私たち自身もそういうことをよくやるのではないですか。神様は私たちに信じ聞き従うようにとおっしゃっているのに、時々私たちは自分たちのやり方で押し通そうとすることがあります。

御前に静まれば、イエス様の御声が聞こえるでしょう。「わたしを愛するなら、わたしが命じることを行いなさい。」

讃美歌 II 173

祈り 父なる神様、いつもあなたの御声を聞き、あなたのお命じになることを行えますように。あなたが私にさせようとしておられることすべてをできるように助けてください。  
イエス様のお名前によって。アーメン。

スティーブン・クラーク・ゴウド

6月15日(水)

## 恐れに打ち克つ

聖書朗読 Iサムエル記 17:20~32

イスラエルの人はみな、この男を見たとき、彼の前から逃げ、非常に恐れた。

Iサムエル記 17:24

ゴリアテ登場!ペリシテ人とイスラエル人は向かい合って陣を敷いていました。40日間、毎朝、お決まりのように始まりました。身長3メートルのペリシテ人の代表戦士ゴリアテが、イスラエル人の陣列に向かって、死をかけての1対1の勝負をしようではないかと叫ぶのでした。彼は、イスラエルの陣を愚弄し、神をそしり、有頂天になっていました。彼と一戦交えようとするような愚か者は誰一人いませんでした。

愚かさや勇敢さが紙一重に見える時があります。戦いの経験などまるでない十代の若者ダビデは、父に兄さんたちの安否を確認してくるように言われ最前線にやってきました。父も兄たちもまさかダビデがゴリアテに応戦しようとは夢にも思わなかったことでしょう。サウル王はダビデに自分の最良のよろいかぶとを着けさせ、剣を帯させようとしていました。しかし、ダビデはそのような物をあてにしませんでした。彼には神様への信仰という秘密兵器があったのです。神様によって、ダビデは5つの滑らかな石と石投げだけで、ほんの数秒の戦いで巨人ゴリアテを打ち倒すことができました。

私たちが抱く恐れは、大きくてゾッとて克服できそうもなく、まるでゴリアテのように思えることがあります。「人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます。」(マタイ19:26)を覚えていきましょう。私たちがほんの少しでも歩み出せば、大きな恐れを※雲散霧消(うんさんむしょう)させることができます。

讃美歌 262

祈り 主よ、私の人生には逃れるのにうんざりしてしまうような恐れがいっぱいあります。恐れに立ち向かい打ち克つ力をあなたのうちに見出すことができますように。

イエス様のお名前によって。アーメン。

ロバート・P・マレン

※雲散霧消 雲や霧が一気に消えてなくなるように、物事が一度に消えてなくなること

6月16日(木)

## ぐ っ ち ゃ ぐ ち ゃ ！

聖書朗読 IIサムエル記 11:18~27

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。  
Iペテロの手紙 5:7

末っ子の息子はおままごとごっこをするのが大好きでした。ありとあらゆる鍋釜を出してきてコーヒーターブルの上に並べ、チェリオス（シリアル）をぶち込み、スプーンでかき混ぜるのです。息子が遊び終わった後には、いたるところに鍋釜が出ていて、1週間はチェリオスがどこかしらで見つかりました。もうぐっちゃぐちゃです。

布巾や掃除機やモップでは片付けられないような混乱があります。私たちの能力以上のものがが必要です。ダビデは神様ご自身のみこころにかなった人物でした。けれども、めちゃくちゃな事態を引き起こすおそれがないとは言えませんでした。ウリヤの妻バテ・シェバのことで、とんでもないことをしてかしました。ダビデは自分の力で片を付けようとし、夫のウリヤを死に至らしめました。ナタンが語った例え話によって、ダビデは自分の犯した罪の唯一の救済法がわかりました。ダビデはナタンに言いました。「私は主の前に罪ある者です。」(IIサムエル記 12:13)

混乱には痕跡が残ることがあります。ダビデは自分の行いの結果に苦しみました。でも彼は赦されました。神様は彼に再び清い心をお与えになりました。

私たちが何かしてかしてしまった時に、どこに行ったら良いかを知ることが重要です。神様が取り計らってくださいます。私たちが進んでみもとに行きさえすれば、神様は清めてくださいます。何と素晴らしい救い主でしょう！

讃美歌 136

祈り ご在天の父なる神様、御子イエス様をおつかわしになって、私たちの犯す罪を解決して下さり、ありがとうございます。イエス様の血潮が私たちの罪とがを洗い清めて下さり、ありがとうございます。  
イエス様のお名前によって。アーメン。



Cheerios

ジョッシュ・バーネット

6月17日(金)

## 思 い も 寄 ら ぬ 謙 遜 さ

聖書朗読 ネヘミヤ記 1章

ああ、主よ。どうかこのしもべの祈りと、喜んであなたの名を恐れるあなたのしもべたちの祈りに耳を傾けてください。

ネヘミヤ記 1:11

ちょっと考えてみると、私たちは祈る時、神様は私たちの祈りを聴いてくださると思っています。祈る時、たいてい「神様」とか「天のお父様」とかで始めて、ただいきなり並べ立て、私たちの祈りに耳を傾けてくださいとお願いしたりはしません。

ネヘミヤ記1章のネヘミヤの祈りが優れているのはそういう理由からです。彼は6節で「どうか、あなたの耳を傾け、あなたの目を開いて、このしもべの祈りを聞いてください。」と祈り始め、11節で「ああ、主よ。どうかこのしもべの祈りと、喜んであなたの名を恐れるあなたのしもべたちの祈りに耳を傾けてください。」と終えています。注目すべきはネヘミヤが、神様は大いなるみ力と権威を持っておられるお方であって、自分のようなただの人間に過ぎない者の祈りをお聞きになる必要はないのだということを認識していたという点です。ネヘミヤは重々承知の上で、それでも、しもべの祈りに耳を傾けてくださいと、へりくだって神様に願ったのです。

ネヘミヤは、神様だから、自分たちの祈りを聴いてくれるのが当然というような横柄な態度ではありませんでした。エレミヤは、主の宮エルサレムの惨状と、困難と恥辱の中にあるイスラエルの子らを思い心配でたまらなくても、全ては神様に主権があることを忘れてはいませんでした。エレミヤは、神様と自分には大きな隔たりがあることを認識していたのです。私たちが困難の中にあるとき、エレミヤと同じようにへりくだった態度を持ちたいものです。

讃美歌 310

祈り 主よ、どうかこの祈りに耳を傾けてください。みめぐみによって、あなたのみ前に近づく時、へりくだるようにと諭してください。  
イエス様のお名前によって。アーメン。

ブライアン・シモンズ

6月18日(土)

## くねくね道を走り抜ける

聖書朗読 エステル記 5章

王は彼女に言った。「どうしたのだ。王妃エステル。何を望んでいるのか。王国の半分でも、あなたにやれるのだが。」  
エステル記 5:3

山間(やまあい)のつづら折りの道を走行したことがあれば、油断のならない危険が道の両側に潜んでいることをご存じでしょう。道路脇の壁に接近し過ぎると反対車線に急に飛び出してしまうし、かと言って道路際ばかり気にしていると岩壁に突っ込んでしまうかもしれません。危険を一つ避けたら、さらに別の危険を呼び込んでしまうといった具合です。

エステルの置かれていた状況がちょうどそんな風でした。恐怖に怯えるあまり、誘惑に陥ってしまう可能性もありました。どちらの危険に陥ちても、彼女の民族ユダヤ人にとって深刻な結果を招くこととなります。そういう訳で、エステルはためらいました。彼女はまず王とハマンを宴会に招待し、翌日も再び宴会を設けて二人を招き、そうしてやっと命がけの願いを王に言上(ごんじょう)することができたのです。彼女は恐怖におののいていました。前妃ワシュティに対する処分を思い出すにつけ王の怒りを恐れ、重臣ハマンの力を恐れました。

エステルは、やっとのことで恐怖心を抑えつつ、胸が締め付けられる思いをしながら、王のもとに進みました。そして、自分と自分の属するユダヤ民族にいのちを与えてくださいと懇願しました。そうすることによって、彼女は国を救ったのです。

今を生きる私たちは、エステルのような状況に陥った時、どのようにして恐怖の壁と誘惑のふちの間を通り抜けたらよいのでしょうか。エステルには自分が果たすべき務めが分かっていました。私たちも神様が私たちに託して下さった使命を自覚するために祈ることが大事です。そして、自分の使命がはっきりしたら、時に大胆な行動をも厭わずに行なう時、時として不安を感じる曲がりくねった道をも安全に通過することができます。

讃美歌 296

祈り 神様、恐怖に向き合い誘惑にもがく時、勝利をお与えください。あなたを愛し、信頼し、ほめたたえます。

イエス様のお名前によって。アーメン。



つづら折りあり

ネイサン・シャンク

6月19日(日)

## あなたの手を握っているのは誰ですか？

聖書朗読 ヨブ記 17:1~16

正しい人は自分の道を保ち、手のきよい人は強さを増し加える。

ヨブ記 17:9

仲の良い若者同士は、付き合っている男女であればなおさら、手をつないで歩いたりするでしょう。妻と私は、結婚生活57年目ですが、今でもそうしています。親しいふれあいは素晴らしいものです。ヨブ記には、ヨブが神様との間に感じていた親密感が読み取れます。しかし、悲惨な状態の中でヨブはその親しさを見失ってしまいました。もはや神様とのふれあいを感じられなくなって、ヨブはなぜ神は私をお見捨てになったのかと尋ねました。彼には神様に見放されるようなことをした覚えはありませんでした。

ヨブの友だちはこぞって、彼がなぜ苦難に陥っているのかについて非難を始めました。神の前に正しくないことをしたに違いないと主張しました。しかしヨブは、神様がいきなり彼を罰しようとされるようなことは何もしていないと力説しました。彼は、できるなら神様と1対1でお会いして、自らの言い分を並べて弁護したいとすら願いました。結果的には、ヨブはある友人を通して、自分を全き者としていることが間違っていたことを思い知らされます。ヨブは、この世に罪のない者はいないことを自覚し、神様の前で悔い改めるのです。そして、すばらしい祝福を受けます。

現代に生きる私たちには、神様の御座の前で執り成して下さるお方、義なるイエス・キリストがおられます。私たちがいかなる試みや試練に遭おうとも、イエス様は決して私たちを見捨てたりしません。いつも一緒に歩いてくださいます。そのことを通して、神様のみめぐみはゆるぎないと確信します。

讃美歌 525

祈り 神様、あなたの恵みが私を取り巻いています。あなたの平和が私の中にあります。あなたの愛が私の後先にあふれています。私の希望と確信はあなたにあります。

イエス様のお名前によって。アーメン。

ジョージ・V・モーテンセン

